

シリアの牧畜社会の変容と資源管理

第3回：刈あとと耕地との組み合わせ放牧利用

ハサケ県における本格的な農業開発の歴史は非常に浅く、それ以前は牧畜民が利用する空間として、広大な放牧地がひろがっていたこと*はすでに述べた。また近年の牧畜民の定住化ないし農耕化はこの土地利用の変換過程で生じたことも言及したとおりである。ハサケ農業開発の特徴としては、もともと農民がほとんどいない地域で大規模におこなわれたこと、大型機械を所有するアレppoなど都市部の商業資本階層が農業を投資対象とするアグリビジネスをいっせいに展開させたこと、の二点であるとされている**。

ハサケ農業開発は、第一段階としてコムギ、オオムギなどの穀物生産、つづく第二段階でワタの作付けへと進み、いまやハサケ県はシリアを代表する穀倉地帯であり、工芸作物の生産基地として地域ないしは国の経済発展におおきく貢献している。しかし、現代史におけるこうした土地利用ならびに居住環境の劇的改変のなかで、牧畜民は生態資源に対してどのように対処し適応していったのであろうか？そこでは、大部分の飼養家畜を手放して農業を主要な生業にするというのもひとつの選択肢であったであろうし、現実にもそのような道を選んだ牧畜民も多数あった。しかし、アブドアルアジズ山地(以下、AA 山地)に半定住集落を築いた Baqqara al Jabal は、かたわらで簡単な農業にたずさわりながらも、従来どおり季節移動をくりかえし家畜飼養を維持させるといった歩みをとった。平原が農業開発されたことによる草原面積の減少、とくに夏の乾季の草資源不足をどうおぎなうか？これが当時 Baqqara al Jabal の直面した大きく深刻な課題であったことは容易に想像のつくところである。しかし、かれらにとってみれば、じつは開発されたムギ作の刈あと地やワタの収穫残渣が新しい放牧資源としてすでに眼前に開かれていたことになる。このような新規飼料をかれらの牧畜へと積極的にかつ柔軟に導入したことで、草原から農耕地へというようなとりまく環境の質的かつ量的変化に対し、みごとな資源適応をとげて、伝統である移動的な生活様式を保ちつつ、それまで未利用・未開拓の資源をたくみにとりいれた新しい段階の牧畜経営へ移行していったことになる。

上記のように、Baqqara al Jabal は農業開発ひいては定住化の大きな時代潮流において、AA 山地における季節移動放牧を基本に刈あとと耕地と組み合わせて、草資源の不足する夏から秋にかけて平原部へとでていく移動放牧パターンを形成した。ぎゃくに、平原部において大規模に家畜を所有する Baqqara al Jabal 以外の人々にとっても AA 山地は春季の貴重な放牧用草資源としてスポットを浴びていくことになった。



大型コンバインによる
オオムギの収穫風景



オオムギ畑の刈あとと耕地放牧



牧畜民青年の出稼ぎによる
コムギ畑の灌漑作業

* 牧畜民(遊牧民)の襲撃がくりかえされ、治安の悪化により村落の荒廃化ないし放棄化、いわゆる<bedouinization>が進行し、現在のハサケ県をふくむジャジーラにおいて定住人口が希薄となった時代は数世紀にわたって続いたという(Wolf-Dieter Hütteroth, 1992)。定住人口がふたたび増加に転ずるのは 1950-60 以降である。

** たとえば、Amin, S., 1976 を参照。